百々裏話（40）

おもて　あきら

〔音曲道歌雑考―その二〕

＊前回と同様、漢数字は本稿掲載音曲道歌の通し番号、算用数字は当該道歌群の中での歌順を示している。

(1)**三十首系道歌**（つづき）

前号で考察した三十首系道歌に属せしめてよいと思われる音曲道歌に、叡岩窟文庫蔵の『永正大永元安伝書』（仮称。金春元安系の五音曲説などを合写）の末部に位置する「音曲口伝哥」30首がある。末に、

古此哥式目ハ公方様より音曲直道を観世音阿弥に御尋候之処ニ御前にてハ如何申上候ハん哉私宅より可申上之由申罷帰以（候）三十首哥申上ハ何も〳〵音曲大事をこめたる哥也□意得よく口伝すへき意也

大永八年戊子五月十八日　如本写之

と奥書があつて、音阿弥に仮託されている。内容は前回に紹介した鴻山文庫蔵『風曲集』の37首と関係が深く、そこから一・二・五・一〇・一六・二三・二五・二六・二九の九首を除き、次の二首を加えた形である。

18、都より下りて謡ふことあらば
　ふし曲知らば助音をばせよ　（四〇）

30、踏み当てば盲も蛇に怖ぢつべし
　知らでやすきはうたひなりけり　（四一）

但し、四一には「読人しらず」と注があり、この一首だけは性質が違うらしい。とすると、30首を音阿弥作と言う奥書の文言と合わぬことになるが、それは、四〇の歌が、「都より下りて人の謡ふとも聞き手によりて曲はあらじな」（一六）の上句と、「四座の内いづれよしあし無益なりふし曲知らば助音をばせよ」（二五）の下句とをつないだ形で、元来は二首であつたのを誤写して一首にしてしまつたことに由来するのであろう。四一は、「音曲」ではなく「うたひ」の語を用いている点など、やや新らしい感じであり、数の不足を補うために後に附加されたものではないかと思われる。

同じく『風曲集』の37首道歌と密接な関係を持つと見られる道歌に、観世宗家蔵の室町末期書写の伝書『五音三曲』（天文十九年仏夜叉甚三郎署名音曲伝書、大蔵九郎能氏伝書、天文四年観世次郎大夫入道宗拈伝書などを合写）所収の36首がある。この『五音三曲』の道歌は、『風曲集』の37首から四首（三・一一・三一・三三）を除き、左の三首を末に加えた形で、歌の順序も『永正大永元安伝書』以上に『風曲集』に近い。（原本は片カナまじり）

34、人のする芸ををかしと言ふものの
　わがことわざのよきはあるまじ　（四二）

35、その道に生まれつきたる人あらば
　下手になりつつ聴聞をせよ　（四三）

36、きたるとも知らで月日に誘はれて
　声もしわざもいづちゆくらん　（四四）

ところで、『五音三曲』の33首目までの歌は、『風曲集』等の歌と大よそは似ており、全く関係のない歌というと右の三首のみであるが、似てはいても、少しの言葉の違いのために歌の意味内容が大きく変つている場合が多い。たとえば、

2、音曲はただ太竹のごとくなり
　まつすぐにしてふし〳〵はあり　（四五）

は、「音曲はただ大竹のごとくなり直ぐに清くてふし少なかれ」（四）と酷似するが、一方は「ふしがある」ことを強調し、他方は「ふしが少ない」ことを良しとするのであつて、別々の歌として扱う方がよさそうである。音曲道歌には全般的に変動が多く、大竹の歌にしても、「音曲はただ大竹の如くにてまつすぐにして節すくなかれ」など、四と四五をちやんぽんにした形の歌も伝わつているが、この程度の相違は、変形ではあるが同趣旨の歌として四と同じ歌に扱い、四と四五のように形は

近くとも趣旨の異なる歌は、別々に数えるのがよいかと思われる。そうした見地から、あらためて『五音三曲』の道歌を検討して見ると、次の六首も別の歌と言えるようである。

5、音曲に扇拍子は大事なり
　たゞとつゝみと手立かはらん　(四六)

17、小音の声のしらべはなかなかに
　言ふは言はぬにまさりこそせめ　(四七)

23、われほどの者はあらじと謡ふとも
　聞き手によりて曲はあらじな　(四八)

29、天地をば阿吽の二字にかたどれば
　物ごとにある口にしつらひ　(四九)

30、音曲に人をあなづることなかれ
　それぞれにある家々のふし　(五〇)

32、音曲を直ぐによきとは誰か言ふ
　曲はまがると読まぬものかは　(五一)

四は六の下句を改変した形。㊱は六の末句の「劣るとぞ聞く」を「まさりこそせめ」と逆にしたもので、「声のしらべ」には誤写があるかのようである。㉙は三と下句を同じくするが、上句は全く違う。或は㉚の場合のように二首の歌を一緒にしてしまっているのかも知れない。㉙は三の変形。㉓は三と上句を同じくする。五も三と上句がほぼ同じく、下句が全く違う。三は「字訛りが少ないのが直ぐなるよき音曲である」の意の歌であつたが、五は「曲はまがると読むのだから、直ぐなる音曲がよいとは限らない」の意で、ひどく違つた歌になつている。一見、『五音三曲』の歌の方が古拙な感じであるが、他の同系道歌群と比較した結果からは、『五音三曲』の方が改変した形であると考える方がよさそうである。

ところで、前回、私は、鼓伝書に見える30首道歌が某になり、それに七首を増補して37首の『風曲集』の形になつたものと推定したが、『永正大永元安伝書』の30首も、『五音三曲』の36首も、前回ふれた『花伝髄脳記』系の36首も、みな『風曲集』の37首の形を基にしていることを考えると、鼓伝書系の30首も『風曲集』の形から派生したものであると見る方がよいかも知れない。また、36首という、三十六歌仙にあやかつたらしい歌数が多いことを考慮すると、『風曲集』冒頭の一の歌が全体の序に該当する別種の歌で(『花伝髄脳記』がその形)、残る36首が音曲道歌の基本型だつたのではないかとも考えられる。とすれば、これまでに言及した音曲道歌群は、「三十六首系道歌」ないしは「歌仙系道歌」と名付ける方が妥当であつたかも知れない。

なお『五音三曲』の別の部分には、音曲とは無関係の、宗教色の濃い道歌14首が記載されている。典拠があるらしいが、私はまだ調べ得ていない。参考のため附記しておこう。

(片カナの部分は原本のまま)

○寝覚にもつくづく思ふ憂世かな厭へとてこそ鐘は鳴るらめ　○憂しとだに思ひ知りなばヲク□マノまたも憂世にわれはめぐらじ　○とらへても留めぬものは命にて流れて早き月日なりけり　○うらやましいかなる人の心にてやがて仏の身とはなるらん　○立つ波に急ぐべきかなあま小舟無常の風は時を□ラワズ　○悟人の知り顔にして知らぬかな必死ぬる習ひありとは　○生まれくる人となる身は物ほしや喰はでも済でも世には住まれず　○さるにても叶はぬことは願はれてスツルハヤステヨヲヽイトハシ　○トリタキハ仏心ワガ身ニテ万のことは捨てたくもなし　○いぬ人のあとまで偲ぶわが心あしき人にて語らひもなし　○言へばなしただ大空にアリノミノ仏ばかりを杖と頼まん　○わが身には深山の奥ぞすみかなる草木は人の咎を言はねば　○明日ありと思ふ心に化かされてけふも空しく過ぎにけるかな　○身ひとつは山の奥にもありぬべしすまぬ心ぞ置き所なき

(41・6・28)